



岷江入楚

靖蛉

卷五十一

特別
~ 12
4604
51



112 特
4604
51



蜻蛉

元五歳 大将 弘光の元五歳乃より秋よりありと云

四月宮内如君投身事

弘云秘受拜云云浮舟君投身乃翌朝より五月
よりりり秋よりり常志亦六歳の事云云よりり
舟乃より三月廿七日の日よりり四月乃より



宮内使系守同如君失知く他内系事
時方乃宮内使行向守治事 逢侍後君事

母君来問子細事

車載在如君蒙亦向山焼上之長葬送事

大将取七ヶ日春葬お石山事

兵乃云致恩守治事 公地惚知事

大将訪系知事

蜻蛉或は宮内大乃着服事

大将の守治如君事 語り兵乃云云知事

五月大將缺并於兵部以官事
 自宮寺時亦如字在右近未了
 太子不系仍侍從未系
 棉苜裝東木為侍從贈物事
 大將及後官以事
 太子不系物語無以官通在船中終事
 大將及右律師亦給彼進善法事
 大將及右文書常陪母上事
 使贈羽屏常太子不系
 常陪書來母上所問非未失也他大將恩事
 四十九日仙事律師執行事
 兵部以官銀壹緡金送右近君事
 二宮任或戶以行事
 大將念人一不宮女房小宰相缺文於大將身
 以石中物身為六案院并紫上被行八海事
 大將自馬石方身見一不宮事

女房代觀事

大將念申一不宮事
 大將謂女二宮不似一不宮事
 大將兼中宮見物事
 大將以一不宮御方事
 一不宮女房中文以事
 一不宮女房大納文與中宮物語事
 大將與小宰相未事
 自一不宮缺文書女二不宮事
 被色物語事
 其以宮又選侍從物語事
 侍從兼中宮服事
 蜻蛉或戶以文非君選取中文御方事
 其以宮公懸事
 大將兼中宮以直家一不宮身
 其以宮不系戲言事
 中宮不系引帶大將戲言事

大和引和琴事
蛭蛉或乃心文姫乃西對為御方事
大将系其子孫事
年長女為出也物言事
后

蜻蛉

卷名歌并詞ニアリ

何ありと名て年よいこれと連て又好く色を以て信し好
私にありあの詞はほくくとさうほげくはるるを
けりよの物にらるるにこれしよをとり

卷名にありあにもれしよをとり
まへらるるあり

夫 卷名ありまへらるるあり けりよの物にらるるにこれしよをとり
蛭蛉乃やうなるとありやあまの蜻蛉なるをれ飛たる
をこりたるわ又事をけりよの物にらるるにこれしよをとり

蜻蛉情蜻蛉乃一名同云蜻蛉をとりて一春蜻蛉をとり
蛭蛉とんころ又けりよの物にらるるにこれしよをとり

卷名あり并詞あり之字あり終の翌日あり五月あり
て林にありて草亦六歳也舞けりよの物にらるるにこれしよをとり
陽燄亦乃流ありありて蜻蛉乃とす也をとり

けりよの物にらるるにこれしよをとり
けりよの物にらるるにこれしよをとり

空蟬夕魚權を介不て梅討幕本は何れなり
夏浮櫓舟の終るる極之

「こよいんをねをわとめさいげとねなり」

何彼カレコ

浮舟乃巻れ末、娘之の我舟をうしとんとつるま
み、いりまきく舟をうけつるす又人のまき
かたはふるまよとまきとる人のまきわつら
ら、いもまきつたゆも物流乃つらり、ぬりく
ま、くまきつらり、物か

浮舟乃をうけつらり、物か

浮舟乃をうけつらり、物か

物、つらり乃いりまれ人、ぬまきつらり

古物流のと母、つらり、ぬおり、女物か

佐古の物流、娘之の母のめり、これ任のほ、つらり

いとつらり、いさけつらり、つらり

浮舟乃物流、つらり

浮舟乃物流、つらり、何海流、つらり、佐古物流、つらり

つらり、つらり、つらり、つらり、つらり

くわいといひついで

ちり物終よりけりともや一ぬかきこらういふことぬい
作元の合ふに

京よりわきしついで

母より使こたれ乃巻よみしや

母よりしりり踊るもせしはく笑

又人をこそさや

つらぬもやうりしついで又母の人をせらる

いふことぬいんとあつりしついで

東人のむすをしついで

こゝろのうらむことたふし

何と推せよとせよとぬい

ちりゆりしついでついでついでついでついでついでついで

あつりしついで

右をゆい

身をけりぬい

何れよりうたはれしついで身をけりぬい

かきしついでこのあつりしついで

母よりしりり又ついで又ついで又ついで又ついで

れりついでついでついでついでついで

母の文のついで

こゝろのうらむことたふし

何れよりうたはれしついで身をけりぬい

物ついでついでついでついでついで

母の文のついで

京の文のついでついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついで

京の文のついで

ついでついでついでついで

ついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついで

ついでついでついでついでついでついで

くらくらくりきとあけくそ

母乃方(の)通すこ 多石をうけてわげん

母のこいれ通すは後又あわいんことを知りん

この世の君はまといて養教はまらるる後の巻れ

いあらひいよはねをうけてまらむつとぬと君ははな

まはなをうけていよのまことりなりけん

是よりたをうけていよのまこ

あしとりとよこをうけて 何仔細物終 前助

躑躅蛇アコスリ 土た回あり ぞり乃 籠巻とてあり

別 躑躅寺ト号ス

まら子 子どものやせ

幼稚りり子のこいしと

いしとわほしとわけしと

是は浮舟の物をあけくうらりしと見えしと

おとらくしと見えしと

身をたけくると大なる推登しとてくそ

いふゆよんくまういしと

いふゆんくまゆ物のかいしと見えしと

まらといと見えしとあけしとありしと

女君奇しと見えしとまら子世にまをすしと

まらと見えしと

いつこをしと見えしと人のあしと見えしと

わらわらふとのこいしと見えしと

浮舟の句をあけしと見えしと

あしと見えしと

白乃又をも使のそりてくそ

くろくもいしと見えしと

白乃の使はしと見えしと

あしと見えしと見えしと

いしと見えしと見えしと

くろくもいしと見えしと

さうりけなくわらし物ととののよこ

晴のぬくりことい夢病死よむ夏なりと句乃こころ
おぼしきやうさなりしけきい

何とも句れをよーのいふ言をよ

晴さういきてけしき見

夢 友もつ大吏如雲控ち句のぬりのとよこ
よのちぬ友いりるや神り夢 夢 夢のゆに時方り神こ
らたまり 何并論

ことつらるるやきて 夢うこけけりたてはめりといこ
さうりとしていとおおつりしてや

又句乃くぬし詞こ

いとわしふぬけし ぬい

句の切たらぬを時方りこよん
やせぬ人こくいふつさぬ
句美たすとの字はぬすするらやそくぬし刺しけ
雨はそくしやうやこしれと

浮舟乃身をたけしわらう日の西は西の日空流院を
信如乃浮舟をんけけきしる同日なりし 平明巻り
げそのぬし

時方りことけらるるやきてい集りてしとさうりよま
こいしやうておさめたぐさうらなま

葬送乃しゆこ

右とつ約ししり後時方のあまきいふをさうり

いすいひとあしたと

いとおさまりしくさるしとわぬ
物後、時方りよ詞

日くちも物さるししりつるさぬ
うぬ舟乃物さるるさ

いとぬいとわらうしと
句美たりし物たるとんのぬてむなしく侍候は

しりしわのほくくろりたれしよ上の巻は見えたり

初一日百あれしやあつてろりたれしよ

このけしひたれし人のいしゆりてろりし

常一の織もろりし

とんとろりし

ゆのとろりし

何方ろりし

むろりし

私めのこれなけし

いけし

兼 兼 兼

いけし

何 宋玉為屈原作招魂詞云帝告巫陽有人在下我欲轉

之魂魄離散汝巫与之

餘生欲老海南村 帝遣巫陽招我魂 東坡

死 死 死

折し

を

原

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

つ

かゝぬまもまゝしるを

夢 時名 詞

時名 詞
かゝぬまもまゝしるを
やうこそしれどやうこそしれど
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

かゝぬまもまゝしるを

時名 詞

かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

かゝぬまもまゝしるを

時名 詞

かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

かゝぬまもまゝしるを

時名 詞

かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

楊貴妃 唐帝 思 李夫人 去 漢皇 情 頌

かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

時名 詞

かゝぬまもまゝしるを

時名 詞

かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

時名 詞

かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

かゝぬまもまゝしるを

時名 詞

かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを
かゝぬまもまゝしるを

かゝぬまもまゝしるを

かゝぬまもまゝしるを

薫乃より母乃となせし句のすまひをいふに
この世とをいふ人—まぬまぬ

薫乃より母乃をいふ人—まぬまぬ
いと身をきくは—わづらひしかな

薫乃より母乃をいふ人—まぬまぬ
のまをいふは—いづく—

侍従のまをいふは—いづく—
私をいふは—いづく—

私をいふは—いづく—
私時方—

私時方—
この世とをいふ人—

この世とをいふ人—
薫乃より母乃をいふ人—

薫乃より母乃をいふ人—
侍従のまをいふ人—

そいふは—いづく—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

薫乃のまをいふ人—

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持
 おと國維乃石物なまら二条后をとりたたく
 とくして西の鬼より又紅染に小松帝時仁和年
 八月武臣友松原有鬼食人は則大佐之曰六月帝
 崩御是其徴歎き先鬼乃人をくらふ例也
 并 女三のいありら人のたりていさるいひらと
 女二のいありら人のたりていさるいひらと

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

伊豫物持乃鬼や一とらよくいへけは伊豫物持

とてをぬよげん人を

秘い事をかりしを母はよこせと

いほくも色くはるるはぬよげんを

秘意やむりあり

あはらるるを思ひたりとて

秘信守のぬり出来ぬはるるをあらすといふ

いとをさしほとわくぬを

秘やましほとつりしはく川なり界を

あつりしはぬすとて

秘母はあつりしをよとんと

よんとてさつり

秘石をゆはたまたつりあつりしにけるを

いづらとてさつり

母のあつりし

いづらとてさつりあつりし

母のあつりし何なりしゆりしといふをりぬ人し

はくもさつりぬあつりし海の名なり

秘日本紀に深淵をたふることありしといふ大海に

なるといふを水原抄云ふこの物語ありと

人のいひつらんすといふとていひしと

あつりしをさつりしとていひしとていひしと

この人さつりしとていひしと

秘侍候石をり車をさつりしとていひしと

水を人さつりしとていひしと

あつりしとていひしとていひしと

秘何れを記すかといふとていひしと

上月黄帝不死今有冢何也

其衣冠史記

葬衣衾事

舊事本記第五饒速日尊稟天神御祖詔棄天磐船

而天降既神損去坐天高皇產靈尊以為哀位即

使瓢命命將上於天上其神屍骸於天上歛竟矣
鏡連日尊以夢教於事御炊屋姬云女子如吾歎見物
昂天璽瑞宝矣亦天羽弓羽々矢復神衣帶千貫三
物蓋欽於登美白座以此為暮々者也略記
日本紀中七時日本武尊化白鳥從陵出指倭國而飛之
群臣亦因以開其棺觀而見之明衣空留屍骨無之然返
衣衾を葬むるは木例歟
高翔上天從葬衣冠

乃乃と子の太とこりれりあらりあぶり
浮舟のりれとの子れ大座や

カ一とや一まらふ
浮舟の存生まるとふゆや

たふうどわりま
浮舟よとやうとのぬ人内令人右と史本并
右と史や蒸のとのぬ人

由合人負教ハヤヤ
百人のり

つとま

はとうらうのすいぬまのり
法師乃とありてやす
をば人となを死人あらうに葬る例
いとらなしてけりいそてぬ

の片の烟まらうけ烟とまらうまらう
人ともい中くまらう

常階命つら物もい登人かまらう
入棺拾骨とやのり

入棺拾骨とやのり
母乃中ら親あら人い京の人のあはく

花乃のまをまらとら人いひまらう
花乃のまをまらとら人いひまらう

人のこりらうとれまらう
人のこりらうとれまらう

おろしなういり
おろしなういり

をうし

わくとも苦のうらむし ねむやうれをてて
— ちり— ちり— ちり— ちり— ちり— ちり—
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

け— け— け— け— け— け—
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく
いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

いぬぬくちりぬぬくちりぬぬく

よ乃るすい
葬送せし作法に

りろしりろし海に

冠礼元服中婚礼嫁娶す大葬礼葬送礼記より

けこり礼人間の一生乃るすれ作法にふるる聊余

たろ作法をいつくとのゆゑに

おのいあにしりすい

葬の由為とありしと

大葬大補志く

仲信也

たさしよはしりすいをのりとも

あしりんちりすい海に嫁しりすい元い

わさしよはしりすいすいすいすいすいすい

殿にれいとありすい

葬の由はしりすいすいすいすいすいすい

おとつとたさしよはしりすいすいすい

白文の寄道のしり

しりすいすい

墮

物乃解意わたりすいすいすいすいすい

たさしよはしりすいすいすい

女之文のしりすいすいすいすいすい

私女之文石おはしりすいすいすい

え乃りすいすいすいすいすい

私女之文のしりすいすいすい

しりすいすいすいすいすいすいすい

しりすいすいすいすいすいすいすい

しりすいすいすいすい

あしりすいすいすいすいすいすい

しりすいすいすいすいすい

しりすいすいすいすいすい

しりすいすいすい

女乃るすいすいすいすいすい

大君やけはしりすいすい

或るまゝとてこゆるとせぬよしけれぬものかへも
けりたるを知らぬはあつたよつとまうつらして
んけんふり或るまゝ系圖にあり物産の中心を
秘けりたるを知らぬはあつたよつとまうつらして
父の兄や原乃兄也けんけんふりの或るまゝ系圖
凡そこの世の世なりわいもかくもかくも
けりたるを知らぬはあつたよつとまうつらして
てぬれ物もあつたよつとまうつらして

あつたよつとまうつらして
美実乃遠例にわたりて
みしぬらんもあつたよつとまうつらして
美旬乃心れ鬼は夢つつまうつらして
おらんくは病もあつたよつとまうつらして
秘うらふもあつたよつとまうつらして
内々今よまの心もあつたよつとまうつらして

をりたるを知らぬはあつたよつとまうつらして

涙痕不潔君恩断 杖却千行更万行

あつたよつとまうつらして

旬乃心れ鬼は夢つつまうつらして

あつたよつとまうつらして

あつたよつとまうつらして

あつたよつとまうつらして

あつたよつとまうつらして

あつたよつとまうつらして

こゝろをうつしをりつゝさるゝ

白鳥のついで

多自りて葉は白鳥のよむを浮舟のあつたるよりして
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに

可憐病粧半夜驚人薄媚狂雞三更唱曉隨仙宮
りつゝをえしつゝ

葉乃りて白鳥の浮舟のついでに白鳥のついでに
いふと叶は白鳥のついでに白鳥のついでに
やまゝに白鳥のついでに白鳥のついでに
物のあつたれを白鳥のついでに白鳥のついでに

葉乃りて白鳥の浮舟のついでに白鳥のついでに
浮舟のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
またりつゝをえしつゝ
何れを白鳥のついでに白鳥のついでに

白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに

世間の物流るるついでに白鳥のついでに

白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに

白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに
白鳥のついでに白鳥のついでに白鳥のついでに

けしきなりいさくあはれはちを

白の玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

秘 白乃詞

私白のいしたまはちを

いとあらねれはちを

白の玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

いとあらねれはちを

秘 薫の詞は白乃玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

いとあらねれはちを

秘 浮舟の詞は白乃玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

秘 中元の詞は白乃玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

うらなれはちのいさくあはれはちを

秘 不例乃時むさくはちのいさくあはれはちを

いとあらねれはちを

浮舟のいさくあはれはちを

いとあらねれはちを

秘 薫の詞は白乃玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

秘 浮舟の詞は白乃玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

いとあらねれはちを

秘 當代乃時むさくはちのいさくあはれはちを

いとあらねれはちを

秘 浮舟の詞は白乃玉身はあはれはちを

いとあらねれはちを

いとあらねれはちを

浮舟のいさく

これもつらうしついで時のみとの心しそをりらたてまつり
か薫乃親身も女ごまの卯さくのとくごまご
この人乃らうたて

ほふをいふ

人ほくせさるるありこれらんるるさけわり

何人非木石皆有情 不如不遇傾城色 白氏文集

心非木石豈忘深恩 遊仙窟

仁王經曰初一念識異木石生得善生得惡

伊勢物語むしり男ありけりかをさくしり

月日つとくげとつ木にありねんるるあやうん

人非木石皆有情 これいふ事人の事を天の作

を各の儀武帝乃らうけさるるをいつり物おれ

乃らうるこれら本をわめぬのいふてあて

のら乃らうるやたるといふとらうら

華道乃聊余りるをり

あつしつとらうら

あつしつとらうら

ほらうらとくしつとらうらあつしつとらうら

いふことらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

あつしつとらうらあつしつとらうらあつしつとらうら

よいものみかしくとせよあり けんを又りうへうつちをこも
いなり

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして
あふあふあふあふ

中^格と白^格と

けしとあつたうみ

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

中^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして ころん^格のふかして

花^格のふかして ころん^格のふかして

六条のふりさるる人けくろくをたすのにおほほをの

六条のふりさるる人けくろくをたすのにおほほをの

計つた物むつりしくおほほをたす

りおとせくとのまを

りおとせくとのまを

いとあまのやま

浮承のつり句のち

まい乃んこりし

私大日記或大補道定

け二人をりし

石ををむつりし

定後石ををりし

母ををりし

浮承の母川のけ

白り使

いとく

浮承の母をりし

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

いとく

くのおもをくついでいよま

すい、詞をよまりたるこのお使りと

いよまていよまて人をおやして

右を、詞

物よらんといふはいついたあつて

物よらんといふはいついたあつて

大史とたのまて

時方、右を、詞

物の心とまりぬを

毎句のうらみなりけりもあまのこころし

右をたよといひ来久しとて

よくしりしとていふは

の心とまりぬを

まいしを何と

平白木の使の詞はあまのこころし

よまていよまていよまて

わい、くのうらみとて

ほみなりぬをいふは

こころしとていふは

いりぬとていふは

いふは

時方、詞

いよまていよまて

いよまていよまて

いよまていよまて

いよまていよまて

いよまていよまて

いよまていよまて

時方、詞

いよまていよまて

いよまていよまて

穢中よといふは

ろやせせすよれひしり

毎時名詞

いしわへとせあま

白美のけ物おりのうくして樽りわへぬはゆると

浮舟のたり着服とわりくうる舟よりのぬれと

ありしとぬいと

句のありてはぬれは

くわいしぬ

ゆれり浮舟の服を

つらん人がせぬ

下をぬこれうも

浮舟よらんぬ

若服のましに

いしわへとせあま

おつせしりこのた

ゆれり浮舟の服を

人よれ

ゆれり白美へ

まこの人

句この人のゆれ

女君はあ

中へ句のぬれ

りの夜

私自ら

りの東の

いしわへ

の舟生のぬれ

いふにうらなひにいふにうらなひに

物とてあつてゐるにふしうにむすくはるるもの

かりに——いふにうらなひにいふにうらなひに

れをいふにうらなひにいふにうらなひに

いふにうらなひにいふにうらなひに

いふにうらなひにいふにうらなひに

いふにうらなひにいふにうらなひに

いふにうらなひにいふにうらなひに

いふにうらなひにいふにうらなひに

のいふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひにいふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

いふにうらなひに

我をくろくたしむと

薫のぬりたるまははのうら

とらこいしぬりし

月をこけぬりと人のく

れをくけぬり

これかんとんも

入水たのめんとぬらぬらと

あをくぬり

これいともはく

ちをくぬり

そのついでに

たをくぬり

ねはもぬりしてぬり

八まのうらぬりて長

ちをくぬり

ぬりぬりぬりぬり

けをぬりの

くくくくくく

薫のぬりぬり

ぬりぬりのぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬり

紅葉の秋風 涼風を吹くも秋の風 — 紅葉の風を吹く

久しき心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

紅葉の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

うらわに秋風 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持
秋の心持 — 秋の心持も秋の心持 — 秋の心持

いとやむねよふこしりりりりりりりり

右とり詞をぬきつれようしる新に
をのつらきこしりりりりりりりりりり
おのえのうへのゆきよ

多中二条流は浮舟ありしつゆのよ
入おりりりりりりりりりりりり

句の二条流を浮舟へまはりりりりりりり
あや—くゆ—あよ—

秘糸をへおるこ多二条流—りりりりりりり
いこのこ—りりりりりりりりりり

ん月お杖お櫃と中えのあき(うはら
世れ—りのすけり句をこまけりりりりりり

下いりりりりりりりりりりりりりりりり
多文のすしこ右を月えありりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

宮をうり—くありれと

是—りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

多葉の者をとをりりりりりりりりりりりりりりりり
すけけちとちりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
河世—りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

糸かたをもふぬ入水などのところりりりりりりりりりりりり
舞る山雲の川ををいあなうをわらひりりりりりりりりりり

あ—りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
け—りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

宇治の里れ名にたえ下のりりりりりりりりりりりりりりりり
人—りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

あ—りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

しるれうらひをぢとん

経葬送かをうらく——せ——とるはふいふと

さつりの人のあはく

母のたよりほおる合たり——あうと

ふのい——とあす——とえ

何向のまをひかりく——母に

らゆり——いから

女二名のあうらり——らるま——母のい
7しと意の推を

けいひもさすいさま——くれと

現をいあうらぬ人なれ——これ人うりけ

ういのあうらり——あ

いらまのうらり——

車欄
をれと又うらなつをわれうは——れやうら本の陰

意の我といふのうらうとく——くならんて

飛りあうら——の物とあ——んと

あうらと——うらけ

あうら阿爾梨の律師よらりあうら——

つ——あうら

經入水の自害のうらわれ——救生の惟授

河如溺水え人急須偏救岸上え人何用為觀經又自救生之道也

あうら——

あうら——

あうら——意のなつれ——何世をいひあはし

あうら——意のこ——うはれ

あうら——意の初をあるま——け——

あうら——

あうら——意のうらつてけり——

あうら——意のうらと——うら

あうら——意のうらと——水原あうら

らせ見たりとぞり

花らとらうりせ見之八雲山ぬきと信氏をいせしり何
海まらせむたのしほとてきこらおほつな
并らせ見たりとつとらせ見たりし一葉
行何海流りしつとらせ見たりし一葉

の母えいさよとむし

常陸の女たちわらわ

さいのふよとんいす

井のつとらとて常陸の家もををわ

又これといふなとんと

母は舟のよとらとてわ

わらわとていふなと

石のつとらとてわらわとてわらわとてわ

のつとらの人とらとて

はよれ一人れとて余の子のよとてわ

ちのつとらとて

母は舟のよとらとてわ

あつとらとてわらわとてわ

母は舟の文れ詞

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

母は舟のよとらとてわ

わたりまゝに人とも

常陸介の子とて秘蔵浮橋巻は小節(使)つづい
ては

いづくもいじまうまけらひなれ

秘蔵も甲し雨下ありこれ秘蔵あつたし(秘蔵)

秘蔵使をいひあけらる

いしきうりまなれゆめ

秘母のいせ

うねれはすそゆけりけり

うやうやはら書かたまふ(い)今のはれ改と

わらわ

あは巻はいしんせつ(い)る初めは

いしんせつはうそ(い)るを

秘字はよそ(い)る

母乃教りあゆめ(い)る

いしけなま(い)る

秘京へ(い)る

里のり(い)る

石是と里乃名の(い)る

いぬ(い)る

母乃る(い)る

た乃(い)る

家業の(い)る

いぬ(い)る

秘字(い)る

井(い)る

いぬ(い)る

何班屏帯

秘班屏(い)る

秘班屏帯四位五位乃人(い)る

秘班屏(い)る

私先ずもつ浮舟の生死のたしむるはめりとする
てしむるはめりとする

てしむるはめりとする
てしむるはめりとする

てしむるはめりとする
てしむるはめりとする

てしむるはめりとする
てしむるはめりとする

てしむるはめりとする
てしむるはめりとする

てしむるはめりとする
てしむるはめりとする

てしむるはめりとする
てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

浮舟の母に來航し

宮にりいをとりし

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

何唐新羅

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

てしむるはめりとする

ふみのうらとぞ 終りくたれ
 夢中えふりののこし
 七條のまゝのまゝ

七條のまゝの信食のすこ七信は舎に四十九日とせよ
 中へ講師 濱中 祝願 三礼 喫散 花堂 達 くれを七信と

ふみま—こまりきよふんて
 杉女こま—こまりてと 夢んとのたけしのね

かろりの人の心おのれら
 んふぬと夢んらねとろりなう—ほねのすをとりまね
 ねふ夢ん

かりぞうなまてく 夢んれ—こまりてと
 むや—こまり—夢んのとこまりてと
 ほんのすを切り 夢ん—こまりてと
 空へいほ—こまりてと 夢ん—こまりてと

夢ん—こまりてと

あ—こまりてと
 夢ん—こまりてと
 かりのすを切り—こまりてと
 かりのすを切り—こまりてと

夢ん—こまりてと
 夢ん—こまりてと
 かりの子も—こまりてと

ふみ—こまりてと
 ほんのすを切り—こまりてと
 かりのすを切り—こまりてと
 かりのすを切り—こまりてと

かり—こまりてと
 かり—こまりてと
 かり—こまりてと

二ふたうんやうのまはりねむりけし

私句まのここのりこ或やの園は入る

群明る中ま服のまのまのりけりまのまのれ園

私けやうのまのまのまのりけりまのまのれ園

あめまのりけりまのまのりけり

一ふたのまのりけり

句ま一服のまのりけり

まのりけりまのりけりまのりけり

一ふたのりけりまのりけり

まのりけりまのりけりまのりけり

かううしてまのりけりまのりけり

小宰相乃まのりけり

私まのりけりまのりけりまのりけり

群まのりけり

群一ふたの方のまのり

おろしことをりけりまのりけり

私琴琵琶なりけり

まのりけりまのりけりまのりけり

私句

私句まのりけりまのりけりまのりけり

まのりけりまのりけりまのりけり

私けりまのりけりまのりけり

私けりまのりけりまのりけり

私けりまのりけり

私句まのりけりまのりけりまのりけり

私句のまのりけり

たのりけりまのりけりまのりけり

私小宰相のりけりまのりけりまのりけり

いとをりけりまのりけり

群小宰相のりけりまのりけりまのりけり

たのりけりまのりけり

私句まのりけりまのりけりまのりけり

かすれたまのりけりまのりけり

中め人のいしうし人よりことなかりと

秘世志

中め人の世志は小宰ねり自まのつまを人よしく
れしうと世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

くしうしと世志しうと

秘世志 中め人のいしうし人よりことなかりと

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志
青表紙三
十月及び海
天文三年
我身
秘世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

秘世志のつらきしは母の志のよきつらき
かく物本はしうと世志

ふのうらこのいあつれなりしおろ

小宰ねのさういひの約をさあといふるま

いとくろしけしおくしけえ

兼 兼乃と海に平生けいさき人なとせし

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

うやうやなともをさしぬる人

これおのうらくしきいさをさなぬてり

兼 兼乃しぬる人といひ入るも何んを小宰ね

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

兼 兼の御に小宰ねの御とつるわりのあはれ

五巻の日記のついで

新薪のゆゑに

中日ん提婆の日記

みどりとあわてゑをくわへ

五日の結成の日に朝庭にてやうく衣装束をとり

のこくあつてむらさき

五日十元八海

佐乳乃日記

くだりのりりりりり

浙堂乃莊嚴をわくむらさき

おのいりりりりり

後夜のお向ふ東に湯たれぬ

にのりりりりり

一おふのりりりり

一おふのりりりりり

こたまりりり

物とてありりり

んこつて困やんらあつた

とつて

おね取なぬ

中々八海

秘八海に束帯をき

けつりりりりり

八海のたれ

ほりぬのりり

おね取のりりり

んをすすてぬ

提元乃やとく退か

りりりりり

小宰

小宰

おは小宰のりりり

こつてりりりりり

しんれ〜〜〜

あ〜一おまのしり〜むら〜時の下〜
いを物りあ〜〜〜

仁德天皇六十二年卯五月此歲額田大中廣皇子豫于
園鶏時皇子自山上望之膳野中有物其形如盧仍追
使者令視還來之曰盧也因喚園鶏稻買大山主問之曰
其野中者何盧矣答之曰水室也皇子曰其藏如何亦
用厚曰堀土大餘以草蓋其上敷敷茅荻取水以置其
夏月不泮其用即當熱月漬水酒以用也皇子
則將來其獻于御所天皇歡之自是以後每當冬令藏水
つ建らわち〜〜

仁德天皇六十二年卯五月此歲額田大中廣皇子豫于
園鶏時皇子自山上望之膳野中有物其形如盧仍追
使者令視還來之曰盧也因喚園鶏稻買大山主問之曰
其野中者何盧矣答之曰水室也皇子曰其藏如何亦
用厚曰堀土大餘以草蓋其上敷敷茅荻取水以置其
夏月不泮其用即當熱月漬水酒以用也皇子
則將來其獻于御所天皇歡之自是以後每當冬令藏水

干春分散水也

〜〜〜

あつき日ち〜〜〜
木中へ〜見ぬ〜
〜〜〜

〜〜〜

干春分散水也

おまへた〜人〜ゆ〜つら〜
何願前後た右粉色如土 長恨教傳
紗長恨奇傳粉色如土とあり貴妃のあ〜
〜〜
〜〜
〜〜
〜〜

肩うらつたんいふさういあらんや

お是とをきしへはくく女う肩まつたよと月意あ

申しくおあつたはよいとくるしけ

おあをころん小宰相あめよ初

おあをりてあういすしんあつたあを

とて幸あなうらつてあつたんと

きてなういあ

おあをころんあはまうと

このあししらんあうら

お小宰相のあつたあをい

あしらんあをいあ

ことんあはつて

おとあらん

お別らん

おとあらん

紙よつておあ

おあをころんあはまうと

いとあつたあをい

おあをころんあはまうと

あはまうとあはまうと

おとあらん

おあをころんあはまうと

おあをころんあはまうと

おあをころんあはまうと

おあをころんあはまうと

そとては厚福へありとるついで
家下らふ女の目をなとていふ海
かしらひつ

これと同一くけし〜ぬいぬい

このかきし〜す〜い

夢 夢をとり

かとしら〜り〜

夢 夢をとり

これおし

夢 夢をとり

たのちぬのき〜らな〜ん

舞 舞のき〜らな〜ん

い〜らぬをすし〜なりと

花 花乃ま〜るをすし〜なりと

思い〜やうぬ〜り〜す〜けぬ〜やと〜り

かすし〜す〜い〜も〜せ〜ら〜ん

舞 舞のき〜らな〜ん
今とらま〜い〜は〜り〜て〜

つら〜り〜て〜

つら〜り〜て〜

妙 妙は女乃つ〜いをき〜小宰れ〜い〜約又〜

りて〜り〜とぬ一おまのわ初又下鴈女唇の叙ゆ

の〜ぬをき〜す〜い〜わ〜り〜

を〜け〜て〜

舞 舞のき〜らな〜ん

け〜り〜吹〜小宰れ優〜も〜又〜

あ〜く〜い〜れ〜り〜吹〜と〜み〜い〜り〜又〜下〜ら〜

の〜人〜い〜や〜く〜い〜ら〜い〜ぬ〜く〜た〜ら〜

舞 舞のき〜らな〜ん

一〜し〜た〜り〜り〜り〜て〜ぬ〜く〜た〜ら〜

舞 舞のき〜らな〜ん

一〜お〜ま〜を〜き〜す〜い〜わ〜り〜

い〜し〜ぬ〜を〜き〜す〜い〜わ〜り〜

舞 舞のき〜らな〜ん

申しくらりくらくいなること

秘見くめいしてまはり

女や乃ありと云

秘女ニ云あり

是は蕙のわつりの女ニ云わたり

秘女ニ云あり

あせとてはははははは

あせとてはははははは

一不文のやを蕙のうら

これしりうをたひ

一不文のうを物なをふり

ほりてとんと

あせとてははははは

秘女ニ云あり

秘女ニ云あり

大哉とて物のひとのや

一不文のうらうらわいをよひり

秘女ニ云あり

一不文のうらうらわいをよひり

秘女ニ云あり

まのれおみんぞ

秘女ニ云あり

のりけつるお

白きうを物りひん

たよりこつてまらぬ

秘女ニ云あり

一不文のうらうらわいをよひり

秘女ニ云あり

人むけくみおりなんをたて

秘女ニ云あり

人むけくみおりなんをたて

秘女ニ云あり

いりこいこい

秘女二女の御家

けいこいこいこいこい

秘女二女の御家

おきりこいこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

并
白の繪
あせらる時
こゝろあ
まの女
まのち

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

女二女こい早下りてきつておきりこい

あめとともいへばねむきの

石 女三美のまゝの上り詞よ石美のまゝのうらみ

あしたとありしことしつとあつた
女三美の

娘美の西しつとり西しつことゆめを
一美の西しつ

うやうのおとこく物とせぬらん
石 繪たをりし

石 繪る子らとや 美
并 繪りたを女三美へあつと針つと

なむらうおあつてまゝらんこみるいせゆし
石 萱のうらわつてつらさは曲色なりさるふ

并 萱のりてありな女三美曲とたりさるふ
しりあつせむしと

たとしてをててこしぬらん
石 中三美の西しつ 美 并

いこうくはなまりぬ

れたる葉中たもぬむうとことりや

いせうのうらわつてつらさは曲色なり
一美えしつ西しつうこわれとともめまんとのおん

美の西しつ
りれよりとたとはせ

女三美のまゝの何とて西しつれあつと見と
れしつうらわつてつらさは曲色なり

石 萱乃詞 并 美
りれよりとたとはせ

成りしつとを
りれよりとたとはせ

りれよりとたとはせ
りれよりとたとはせ

りれよりとたとはせ
りれよりとたとはせ

りれよりとたとはせ
りれよりとたとはせ

ていときこちをねねりけんをいすすてをねりんうた
多あひりういひわれー西兄弟のとーとうとまゆを
ススス(芭蕉のうー)Pか

まーいばるるけーいあわらとーい

石一石を芭蕉のうーいけーいあわらとーいねりねりねり

多芭蕉の下をわりてーいあわらとーいねりねりねり

いと東のうーいの人あらん

石小宰相君のうーい

ありーいあわらとーいあわらとーい

秘 八海のつれ後ぬ

并 八海乃後女一まのいー方り

よーいあわらとーいあわらとーい

并 女一京文の四方へかりり

左のちぬりあわら

ウノ音の心子

スーいあわらとーいあわらとーい

秘 芭蕉の詞をり

このぬりこれげんは入とりりくゆれ

并 女一京文の物りーいあわらとーいあわらとーい

多 并ノ多なる内裏ーいあわらとーいあわらとーい

奏せらるを見事とらふこれとらふあは芭蕉のうーい

一京文を物りーいあわらとーいあわらとーい

いあわらとーいあわらとーい

白はあわらとーいあわらとーい

并 多はらうの事

多 芭蕉のあなをいあわらとーいあわらとーい

石いのうーいあわらとーいあわらとーい

秘 石ウノ音乃京文の君を

いあわらとーいあわらとーい

秘 女房達の詞

おししりしりしりわりのぬ

一足おのめ居るやと見えわくしりしりわりのぬ

船へあわせしりしりしりせぬりり

一足おのめ居るやと見えわくしりしりわりのぬ

中へあわせしりしりしりせぬりり

大へあわせしりしりしりせぬりり

中へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

小舟のあわせしりしりしりせぬりり

大へあわせしりしりしりせぬりり

大へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

船へあわせしりしりしりせぬりり

ふもろくせぬくいとくろしきつゆを
石け文の中まをりて 常并 尺くろしき句まのり
らつりーやこの人くわとのぬ
常句まのゆ色を小常ねたもの尺知くろをのり
いとわやーいさるをころ
お大納えわりのまはくろり
あくちりーぬてー人
常字舟のまをころ
ふり西二條のわりくろおとうとせりり
常句まのわちりまのまはくろ常字まのり
ことくろり
常中ま字舟別版のり
いころのまのりまはくろ
常常階のまを字舟の母とを伯母とをりまはくろ
を人のまをぬく常字舟の祖母とを又母とをのり
まはくろいとまはくろ

常字舟ま句の常通のり
いしりまはくろくせぬ
句のゆはくろりまはくろり
女もまをわりのいさる
常字舟も句まはくろり
まはくろいとわはくろり
常句の中まのり 常并 中まのり
くろりまはくろり
常句の中まのり
常字のまはくろり
常八まの一敷の経命をり
いとやびまはくろり
お大納え知
くろりまはくろり
常句の中まのり
常字のまはくろり
常句の中まのり
常字のまはくろり
常句の中まのり
常字のまはくろり

いとけいりるるをいしうりてる并にあらはれし
ころりりねほなほく人のわらわし

并 芥川の太将の物語はあつるなりし

萩のしるあぢいもよ物とつらさうてあつる
福抄まな

夕の凡のさうてあつるも女二女のうらま

うたてとらつたほく
女二女のうらまの西遊はしる繪をうらつて

物とつらつてのしるしるしるの人もあつる
わけまたのうらま

并 夕のうらまはしるしるしるの人もあつる
うらまはしるしるしるの人もあつる

物とつらつてのしるしるしるの人もあつる

時りかとのいしめめをうらま

女二女のうらまをうらま

大志をうらまはしるしるのうらま

あつるしるしるしるのうらま

おほいしるしるしるのうらま

うらまはしるしるしるのうらま

おほいしるしるしるのうらま

うらまはしるしるしるのうらま

うらまはしるしるしるのうらま

うらまはしるしるしるのうらま

いとふらなりてそし人き次おほしつらんと
夢自の夢の石中へまあつらぬわづの母をた
建はれもゆはをりつらんとて人へれと
いしく木ひつらとて
まづたつらもてつらつらぬ

あはれつらもよき人かききえそそちとて
まづたつらもよき人かききえそそちとて
まづたつらもよき人かききえそそちとて
まづたつらもよき人かききえそそちとて
まづたつらもよき人かききえそそちとて
まづたつらもよき人かききえそそちとて
まづたつらもよき人かききえそそちとて
まづたつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

250-10

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

あはれつらもよき人かききえそそちとて

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

あはれつらもよき人かききえそそちとて

昇はまははら人とはな

いとらなりてそ人ー是次おほしつうんと

身自のあつて名中まふしんすねー白の母辰を
建いられもゆきをりしつうんと人ーれをー

いーく木やーんとこ

ちうたしらもりてまひりぬ

身ゆほのち中まふしつうんと

いーりーと下らつうなりと

身侍候りしゆ

ちねあもつてまひりぬ

身まをてゆほありれよつうのけり

の娘まのちあつてまひりぬと今しを

ねいし人おとをのけりち中まふしつうのけり

いーくめとてめ

身侍候りしゆとまひりぬ

ちねにたてまひりし人ま 身ま

身まは似たり人まなりしと

よのまをねねち中まのちしめ

身けりよのち中まのちしめ 身まの娘ま

せしよのしめ

身継母の兄中

身中まのち中まのちしめ

ちこしとすたしりわりて

身中まのちしめ

父まのちしめ

身中まのちしめ

ちほりくのちしめ

身中まの娘まのち

ちつねの娘ま

身中まのちしめ

ちせしとのちしめ

身精鈴のち中まのちしめ

娘まのちしめ 身一ふまのちしめ

二具

まのまなまとうりつれて

拾遺のこし紫うさうとあり

何拾遺 赤く糸染ぬや平ののうりよ子日いつてつ
りまのまといれける人のもとつりける

右巻つ替る位

非はより松をとむらん鳥のつねいあはれをよむ

裳よりむけりけりあつとありけり

秘を畧しうさふまてしとりあつたけり地

舞 何人のやうに礼を裳をさるる人の句

ねしし或まねなと不具のゆんて

私女のまね裳唐衣さるる男のさるる

甲しこれに平生さるるさるる

りをいれりさるるさるる

男の折しりつねのゆれは務るるさるる

或まねたさるる裳はさるるさるる

いれりさるるさるる

常のまこのまわりやま—

まのまをほみまよるさるる

さるるさるる

りんこさるる

秘ほみといとこ八まと或まね中さるる

大ねりさるる

秘句の心を裳のま

まいの心を裳のま

句の好也をさるる

けまよるさるる

明けしとさるる

まのまを父まのい

まま大ねりさるる

秘まのまをさるる

まのまをさるる

秘まのまをさるる

或まねまのまをさるる

あつちのうらなは男を一つめいどりしつねすうら
なかえの志のねほりもすうらつらほ舟なるよ
つら出 つかくふ
おぼ舟の入水と子細なきとくねる流つら
人しらひらせのつら

あはれみから野(よ)ま
まをま
られわれ
えしけねしとつら

たふたふ昔のれけいおさうすうつて
夕暮のえ輝をとつら

夕暮のおうのるは氏の西時おさうすうつて

私おさうすうつては氏の西時おさうすうつて

源氏の一族のれうつて

このまじいのれうつて

私いし物うは倒れぬ名沙わら

は舟のさうのすをうぬぬあわら

自官の中世のね色りわらうと

鳴石中まのねね服るう内(ま)うねんと

このまうするすら

秋のさう
のまを
秋のさう
まを

自(ま) 舞(舞) 舞(舞)
自(ま) 舞(舞) 舞(舞)

自(ま) 舞(舞) 舞(舞)

あのうらまは男を一つめととりしぬすりし
おのゝ心のゆへはしるすといつら浮舟なるよ
らふ出

お浮舟の入水と子細なきとくぬき流しき
人しりいせのうら

お茶のまのまゆりつをわらふをさるも
けしはねりしすをいぬりしひりきりし

お六条流し中女一なまもさるしをさる
中女一なまもさるしをさるしをさる

お六条流し人しをさるしをさるしを
中女一なまのほとけ流しおさるしをさるしを
中宮の木さるしをさるしをさるしをさるしを

おひししきさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

おのひししきさるしをさるしをさるしを
おのひししきさるしをさるしをさるしを

物よりなす統ても
お白の心ゆき

いましんしる花のこゆーしりるを
お白あは及んす白れぬ

いとくし入しちなせしぬねほとや

お白のこくま入をぬぬし又ははとらし

けたち人とあはる

まののうままりりぬ

句や蒸

の侍は物よりの子さくまらふ

お白あはつりし侍は

花侍はちわの二の葉を
をのうてはるは
おのうをさるゆ

りりしゆき

白んたりと蒸なりけりとはは舟のなうしてあし

せしりしゆきなるしんと侍はとら

りのこしゆき

は舟の侍はゆりてさぬぬりる

お白の心ゆき

お白の心ゆき

ふらりの心ゆきしりたなはゆきとあはる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

私福物は舟のこくま白の侍はとら

おの句は見らふ不富ありお白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

のと六葉はわすれお白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

お白の侍はゆりしりる

たゞしなまら女座にむほきくたほせし

多 世間の我と女座とのほしひんしの女のたほせし

女座のほしひん

私 世間の我と女座とのほしひんしの女のたほせし

とすりまてりぬくしん

多 女座のほしひん

井のほしひん

私 女座のほしひん

やまじりま

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

物にさしこみ中へゆけれ

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

多 世間の我と女座とのほしひん

私 世間の我と女座とのほしひん

私に言ふ

かれともしては多とよめりや

早下して暮らと早りなせや

兼 兼言や花とついでの名を歌うすとするて早下して

兼 兼言よとりのあせや

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

私に言ふ兼のよと暮らよくとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

兼 兼のあはれわりのくもさむらとつて暮らよくと

まにもしつりしめ竹

花井の野りとの也春に

新菫のなをとりつれもよとつりしめ花をこ

并菫のあは宿るいとよもわくいとつりしめ花をこ

新菫の奇をとりしめ

大いこの野へのつりしめ

新菫 并りつりしめ花をとりしめ花をとりしめ

新菫 并りつりしめ花をとりしめ花をとりしめ

新菫 并りつりしめ花をとりしめ花をとりしめ

新菫 并りつりしめ花をとりしめ花をとりしめ

新菫 并りつりしめ花をとりしめ花をとりしめ

新菫のわりしめ

新菫のわりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

新菫の河へつりしめ花をとりしめ

ありつゝさねのさくらい——

^并これと葉のゆりいり——

^葉葉へあられ——

えのわぬこお——

句ふりちねのさくらとあつ——

のここの中ねと

一おえの女屋——

女一ふえの中ねと

とあや——

句あのおひらき——

ゆしちねと

これよりあつ——

^葉葉のゆりちねと

てあや——

このえまひらき——

句いりちねと

葉のゆりちねと

とあや

あり——

句のゆりちねと

ゆりちねと

とあや

とあや

女一ふえの中ねと

葉のゆりちねと

とあや

葉のゆりちねと

とあや

とあや

とあや

とあや

あつとくちくせあけん
秘のあつとくちくせあけん
これといふは物なり

秘論語曰維平有恒速而中七

秘人のいふこと——
秘論語曰維平有恒速而中七

あつとくちくせあけん
あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん
あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん
あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん
あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん
あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん
あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

あつとくちくせあけん

是と遊仙窟のやをとりてけり葉をわくの石中文字の第ケレ

ハ一府あふの妙とてのきざりあへり

葉の約女一々のあむらとてこれと申しけり句を辨けり

潘安仕崔暎とては客鳥のしつれん人とも

葉ののあむら

中文字のつらふし

葉の約女一々のあむらのしく中文字のつらふし

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

らむらつらふらむらつらふらつらふらつらふらつらふら

何品春律調ハ秋ヨシ

律ハ秋ニ又ヤヨシト云ハテ 舞又女ハ陰律也

舞の音ヨシト云ハテ

舞物の音ヨシト云ハテ

舞母もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

舞女もむらつらふらつらふらつらふらつらふらつらふら

別古の詞をうけてよまふこと(9)又らゆめ
詞よそいもあふまきこむらほむをむしむことくら
やうらゝくしつらひののむあり(は言のか
りもあつりあふまき(9)又らゆめ何れあり
ふもいひつ(10)もこしりうりて
ふのふも(11)もあつりびさく(12)のまら(13)ら(14)あ

あつるをんはけてしらすれ(15)ら(16)ん(17)ら(18)ん
過不及の(19)ふ(20)を(21)あり

い(22)は(23)か(24)か(25)ー(26)け(27)こ(28)り(29)ー(30)あ(31)わ(32)り(33)ふ(34)ま

あ(35)ゆ(36)の(37)こ(38)の(39)し(40)て(41)わ(42)ら(43)る(44)ま(45)ら(46)に(47)

あ(48)つ(49)る(50)ま(51)ら(52)る(53)ま(54)ら(55)る(56)ま(57)ら(58)る(59)ま(60)ら(61)る(62)

あ(63)つ(64)る(65)ま(66)ら(67)る(68)ま(69)ら(70)る(71)ま(72)ら(73)る(74)ま(75)ら(76)る(77)

秋風もよる

あ(78)つ(79)る(80)ま(81)ら(82)る(83)ま(84)ら(85)る(86)ま(87)ら(88)る(89)ま(90)ら(91)る(92)

あ(93)つ(94)る(95)ま(96)ら(97)る(98)ま(99)ら(100)る(101)ま(102)ら(103)る(104)ま(105)ら(106)る(107)

あ(108)つ(109)る(110)ま(111)ら(112)る(113)ま(114)ら(115)る(116)ま(117)ら(118)る(119)ま(120)ら(121)る(122)

あ(123)つ(124)る(125)ま(126)ら(127)る(128)ま(129)ら(130)る(131)ま(132)ら(133)る(134)ま(135)ら(136)る(137)

あ(138)つ(139)る(140)ま(141)ら(142)る(143)ま(144)ら(145)る(146)ま(147)ら(148)る(149)ま(150)ら(151)る(152)

あ(153)つ(154)る(155)ま(156)ら(157)る(158)ま(159)ら(160)る(161)ま(162)ら(163)る(164)ま(165)ら(166)る(167)

あ(168)つ(169)る(170)ま(171)ら(172)る(173)ま(174)ら(175)る(176)ま(177)ら(178)る(179)ま(180)ら(181)る(182)

あらの人々又世のよきをたもつる

自らの心よ

私にまことの心よ

わが心の神よ

十命をたもつる

まのまの心よ

いかにいかに

又つくりし心よ

いかにいかに

わが心よ

大略の心よ

あつた心よ

いかにいかに

わが心よ

あつた心よ

わが心よ

わが心よ

わが心よ

わが心よ

とあるけりすこのまのり一陽始を以春陽氣の始乃
やよんんんんをさけりよのりや春自とよち
いれりし一蟄始を告こりりくいのりし
けりしけりしけりしけりしけりしけりし
ことろのまをりてまをりけりしけりし
れんれんれんれんれんれんれんれんれん
何陽始 涅槃經云受者熱時之矣疏曰熱矣輪但有
其各而無其實

華嚴經曰譬言如春月時衆生見矣氣愚者謂爲水
又同經云野馬ト多アリ

夏の月光をましてさつりけりしけりしけりし
^{六瓶}ふとてとらりし物けりしけりしけりし
けりしけりしけりしけりしけりしけりし
^後けりしけりしけりしけりしけりしけりし
^{六瓶}けりしけりしけりしけりしけりしけりし
淮南子曰水萬虫乃蟻

列子曰蟻蟻主朽穢之上因而生觀陽而死

けりしけりしけりしけりしけりしけりし
かまじりしけりしけりしけりしけりし
地の氣のこけりしけりしけりしけりし
一蟄のまをりしけりしけりしけりし
けりしけりしけりしけりしけりしけりし
虫んまの月のまをりしけりしけりし
けりしけりしけりしけりしけりしけりし
けりしけりしけりしけりしけりしけりし
けりしけりしけりしけりしけりしけりし





